

順治二年（1645）の蘇州（2）

滝 野 邦 雄

順治二年五月二十日

『蘇城紀變』にいう。

二十日、^{あま}徧ねく黄紙（詔書）を街市に貼りて云う、南都 已に定王を立つ、と（『蘇城紀變』不分卷・一葉・國學保存會印『國粹叢書』第三集・光緒三十二年（一九〇六）發行）。

（二十日、蘇州の町中に〔南明政権の〕詔が貼りだされ、「南京では定王が擁立された」という）

この定王¹⁾は、弘光元年三月一日に南京にあらわれた自称崇禎帝の太子を指している。ただこの時期には北京にも崇禎帝の太子が現れていた。

この南北に現れた二人の太子の真偽については、孟森（字は蕤孫。江蘇武進の人。一九三七年に七十歳で没する）の「明烈皇殉國後紀」（『明清史論著集刊』所収・中華書局一九八四年第二次印刷）に詳しい。それを孟森自身が『明史講義』のなかで要約したものによると、つぎのようになる。

1) 欽定『明史』（卷一百二十・列傳第八・諸王五・十四葉～十五葉：乾隆四年（一七三九）刊）によれば、崇禎帝には七人の男子がいた。そのうち四人は夭折し、崇禎十七年の時点では、第一子で皇太子となった慈烺、第三子の定王慈烜、第四子の永王慈炤が生存していた。第一子の慈烺、第三子の慈烜は、周皇后の子で、第四子の慈炤は田貴妃の子である。

なお、第三子の定王「慈烜」と、第四子の永王「慈炤」の名前について、孟森は、「明烈皇殉國後紀」第二篇（『明清史論著集刊』所収・中華書局一九八四年第二次印刷）で、『明史』とは異なり、定王の名は「慈燦」、第四子の永王の名は「慈煥」とであると考証している。この考証は長文であるので、黄雲眉（元の名は鑿鉅、字は子亭、号は半坡。浙江余姚の人。光緒二十四年（一八九八年）二月二十日（西曆三月十二日）年～一九七七年）が『明史考證』において要約を行なっている。それによるとつぎのようになる。

〔第三子〕定王の名は「慈燦」にして、「慈烜」に非ず。〔第四子〕永王の名は亦た「慈炤」に非ず、當に〔第五子の〕悼靈王の名の「慈煥」を以て之に屬すべし。〔第五子の〕悼靈王は、五歳にして薨す。其の名は殆ど失考す。……顧荅の『金陵野鈔』に據るに、「弘光元年二月甲寅朔、甲子に皇太子「慈烺」に諡して「獻愍」と曰い、皇三子定王「慈燦」に諡して「哀」と曰い、皇四子永王「慈煥」に諡して「悼」と曰う」とす。〔顧荅は、弘光の時に方に南雍（南京國子監）に在れば、此の『金陵野鈔』當に最も信ず可しとすべし。『鹿樵紀聞』卷上に「崇禎帝の三子は、周后 太子「慈烺」及び幼子定王「慈燦」を生み、田妃 次子永王「慈炤」を生む」とす。定王の名は「慈燦」とするは、『金陵野鈔』と同じ。惟だ永王の名は「慈炤」とするは、『明史』と同じ。『明史』定王の名を以て「慈烜」とし、悼靈王の名を「慈煥」とす。乃ち孫承澤の『山書』の誤りを承く。他書 未だ之れ見ざるなり。其れ永王の名を以て「慈炤」とするは、則ち『鹿樵紀聞』の誤りを承く。蓋し『山書』は永王の名を詳しくする能わず。『明史』因りて『鹿樵紀聞』を採りて之を補うのみ。説は、孟森の「明烈皇殉國後紀」第二篇に詳し。〔しかし〕其の文 甚だ長し。余（黄雲眉）特に撮要して之を述ぶ（中華書局一九八五年刊『明史考證』第四冊・一〇四四頁・明史卷一百二十（列傳第八）考證・永王慈炤・「不知所終」条）。

[太子のことについて]今を以て之を考えるに[以下のようになる]。上年(崇禎十七年)の冬、太子 已に北都に見われ、清廷 亦た以て偽と爲して之を殺す。[北京にあらわれた太子については]太子の外祖の周奎の一家 先ず與に相い[太子だと]認む。并せて長[平]公主も亦た[周]奎の家に在りて、兄妹 相い見えて大いに哭す。則ち此れ眞の太子と爲すなり。後、周奎 出首し、清[政權では] 明の故の妃・嬪・宮監をして雜辨せしめ、凡そ眞と言う者は之を殺せば、自ら敢えて其の偽に非ずと辨ずる者無し。且そも[真偽について証言したとする袁妃について]『清實錄』の順治元年五月の攝政王 北京に入るの時に於いて、明の帝・后及び袁貴妃を葬ると書す。後に又た明・熹宗の妃の任氏等發見し給予收養すと書するも、並びに袁妃其の人無し。乃ち故の太子を辨識するの時に於いて、又た忽ち袁妃と其の事を書す。蓋し袁妃の太子の庶母と爲るを以て、自ずから應に能く太子を識るべし、天啓の任妃の疎遠なるに比せず。任妃は乃ち客氏の養女なりて、熹宗を蠱惑する所以の者なり。其の人 民間に流落し、旋いで自ら出でて恩を乞う。且つ曾て天啓の皇后を冒充し、内監の高永壽の爲に識破さる。此の人 媚を清に求め、太子を以て偽と爲すは、自ずから意中に在り。清も乃ち又た偽託して袁妃と爲し、『實錄』の前後の矛盾を致す。蓋し北都の殺す所の太子は眞と爲し、南都の太子は實に偽たり。但だ南中の士民痛く弘光を恨み、益々太子を盼て眞と爲し、堅く之を信ずるのみ(『明史講義』第二編第七章 南明之顛沛 第一節 弘光朝事・中華書局一九八一年三月第一次印刷・三四二頁～三四三頁)。

崇禎十七年(順治元年)冬、崇禎帝の太子が北京に現れたが、清政權は、それをニセモノとして処刑した。この太子については、太子の外戚の周奎の一家が最初に太子だと認めている。それに加えて周奎の家にいた長平公主も、この太子と会って泣き続けたという。このことからすると、この太子は本当の太子であったとすべきである。後、周奎は太子のことを報告した。そこで清政權は明の妃・嬪・宮監に識別させたが、本当の太子だと言うものは殺したので、あえて「ニセモノではない」と証言するものは出なくなった。そもそも、太子の真偽について証言したとする袁妃についてであるが、『清實錄』には順治元年五月に攝政王が北京に入城した時に、明の崇禎帝・皇后と袁貴妃を葬ったと記録している。また後に明・熹宗の妃の任氏などが見つかり保護して養ったと記録するが、袁妃については言及されていない。ただ太子を判定する時に、突然袁妃のことが出てくる。おそらく袁妃は太子の庶母(崇禎帝の妃)であることから、当然太子を知っているはずであり、崇禎帝の兄の天啓帝の妃であった任氏の疎遠さに比べようがないからであったのだろう。任氏は、客氏(熹宗朝で権力をふるった宦官魏忠賢の妾[宦官のパートナー])の養女であり、熹宗(天啓帝)を蠱惑した者である。明が亡んで、民間で落ちぶれていたところ、自分から出頭して清政權に保護を願い出たのである。その上、熹宗(天啓帝)の皇后であると偽って、宦官の高永壽に見破られてしまった。このような任氏であるので、清政權にへつらい、太子をニセモノだと証言するのは、当然のことであった。清政權もまた任

氏を袁妃だと言いつくろって、『清實錄』に矛盾が生じるようになった。北京で殺害されたのは、本当の太子であり、南京の太子はニセモノであったと考えられる。ただし、福王政権下の読書人や庶民は、痛烈に福王弘光帝を恨んでいたので、南京にあらわれた太子をホンモノだと考え、深く信じたにすぎない、という。

また、南京に現れた太子について、『明史藁』（雍正元年（一七二三）刊）では、つぎのように記している²⁾。

太子慈煥、莊烈帝（崇禎帝）の第一子なり。母は、周皇后。崇禎二年二月に生る。〔崇禎〕帝 頒詔（詔を公布）して肆赦（恩赦）す。九月、立てて皇太子と爲す……李自成 京師を破り、後 太子 「終わる所を知らず」（『國語』越語下）。福王の時、北より來りて太子と稱する者有り。朝臣 皆な以爲らく〔駙馬都尉の王昺の姪孫の〕王之明なる者 偽りて之を爲す、と。諸を獄中に繋ぐ。南都の士民 譁然として平らかならず。袁繼咸及び劉良佐・黃得功の輩 皆な上疏して争う。左良玉 亦た太子を救うを以て名と爲し兵を起こし闕を犯すに至る。一時の眞偽 能く明らかなること莫ければなり。南都 亡び、論者 始めて其れ偽と爲すと決す（『明史藁』列傳第六・諸王四・「太子慈煥」条・十六葉）。

太子慈煥は、崇禎帝の第一子である。母は周皇后で、崇禎二年二月に生れる。崇禎帝は赦免の詔を公布して、九月に太子慈煥を立てて皇太子とした。李自成が北京を陥れ、後に太子はどのようになったのか分らない。福王の時に、北方よりやってきて太子だというのがいた。諸臣たちは、駙馬都尉の王昺の姪孫の「王之明」という者が、偽っているのだと考えた。そして、「王之明」を獄に繋いだ。ところが南京の読書人や庶民が騒然として憤った。外臣の袁繼咸・劉良佐・黃得功などは上疏して眞偽を争った。左良玉は、獄に繋がれた太子を救うことを旗印に兵を起こし、宮廷を犯すまでの騒ぎとなった。これらは、当時の眞偽がはっきりすることがなかったからである。福王政権が亡んでから、論者は始めて南京に現れた太子を偽物と決定した、という。

ただ、どうしてこの太子（自称太子の「王之明」）が「定王」とされたのかよく分らない³⁾。それに蘇州だけでなく、江蘇太湖西洞庭山の角里に避難していた薛崇も六月十一日の日記に、この太子を「定王」と伝えている。さらに、浙江山陰（紹興）にいた祁彪佳も、五月二十一日の日記に「定王」が立てられたという伝聞を記録している。すると、福王政権が崩壊した直後

2) 『明史』は、『明史藁』を承けてほぼ同文である。しかし、「南都 亡び、論者 始めて其れ偽と爲すと決す」とあるのを削除する。

太子慈煥、莊烈帝（崇禎帝）の第一子。崇禎二年二月に生る。九月 立てて皇太子と爲す……京師陷り、賊 太子を獲え、宋王に偽封す。賊 敗れ西走するに及び、太子 「終わる所を知らず」（『國語』越語下）。由崧（福王弘光帝）の時、北より來りて太子と稱する者有り。之を驗するに、以爲らく駙馬都尉の王昺の孫（姪孫）の王之明なる者 偽りて之を爲す、と。〔そこで〕獄中に繋ぐ。南都の士民 譁然として平らかならず。袁繼咸及び劉良佐・黃得功の輩 皆な上疏して争う。左良玉 起兵するに、亦た太子を救うを以て名〔分〕と爲す。一時の眞偽 能く知ること莫ればなり。〔清朝の軍が南京にせまり〕由崧（福王） 既に太平に奔り、南京の亂兵 王之明を擁して之を立つ。越えて五日、我が大清に降る（欽定『明史』卷一百二十・列傳第八・諸王五・「朱慈煥」条・十四葉）。

の江南地方には、「定王」が即位したとのうわさが広まっていたと考えられる。

祁彪佳は、「定王」が即位したという伝聞があったことを伝えてはいるが、『蘇城紀變』と異なり、「虜（清政権）」が即位させたとする。『祁忠敏公日記』の「五月二十一日」条につきのように記す。

〔弘光元年（順治二年）五月〕二十一日、……僕人 商に従うの外父（岳父）の處に報を得て、「虜 已に定王を立て、人情 欣喜せざるは無し」と傳うも、後に乃ち「南中（南方）の百姓〔偽太子の〕王之明を扶立し、文武官 一の至る者無し。忻城伯の趙之龍 百姓に諭して、虜の來るを俟ちて講款（講和）し、既に方を定めて扶立の舉を爲さん、と。城の東郭門に至り小舟を以て候つ」と知る、と。外父 時に聖駕 以て廣德に抵ると傳う。然れども亦た訛なり……（『祁忠敏公日記』乙酉日曆・「弘光元年（順治二年）五月二十一日」条・十五葉：民國二十六年（一九三七）紹興縣修志委員會校刊本による）。

①『江南聞見錄』一卷・「弘光元年（順治二年）五月十一日」条に「〔五月十一日〕辰刻、忻城（忻城伯の趙之龍） 出示（諭告）して安民し「大駕（福王弘光帝）の播遷（遷徙）すること有るも、本府（忻城伯の趙之龍） 此の土を死守す。已に大清の帥に致して自ずから裁酌（考慮して決定する）有り。爾民 必ずしも驚惶（慌てふためく）して徙避せざれ」等の語有り」。

②清朝の軍が南京に入城したことを祁彪佳が知ったのは五月二十四日であった。

……道臺（道員）の于公祖（于穎） 已に予（祁彪佳）が村に抵り、晤わんことを求む。予（祁彪佳） 出でて、之に晤う。〔そこで〕乃ち「南中（南京） 十五日に於いて北兵を迎え、北兵は十六日に於いて入城す。旋いで出でて營（軍）を天壇に割（駐留）す。「王之明」は〔清政権に投降した〕許定國の帳中に留められ、北京に赴きて辨認せんとす……」と知る（『祁忠敏公日記』乙酉日曆・「弘光元年（順治二年）五月二十四日」条・十五葉）

③『國權』に「趙之龍 榜示して「軍民 安守して、太子を擁立す。此れ舉國の美事なり。第だ北より來るの兵あるに値り、到る日を俟ちて調妥し、再び議せん」と」（『國權』卷一百四・乙酉弘光元年・「五月癸巳（十二日）」条・六二一頁）。93頁に引く『國權』参照。

④83頁に引く『薛謚孟筆記』に「〔福王弘光帝は〕廣德の山路の徑を取りて武林に達せんとすると知る」と伝える。

弘光元年（順治二年）五月二十一日、下僕が商売に従事する岳父のところで「清政権は、すで

✓ 3) 全祖望は、「題戾園疑跡二」において、つぎのように述べる。

乙酉（順治二年〔一六四四〕）以後、東宮・二王の踪跡 雜出するも、皆な流傳 據る無きの詞なり。南〔京にあらわれた〕偽の太子は則ち東宮に近似し、北〔京にあらわれた〕偽の太子は則ち永王に近似し、其の浮屠の一鑑^①は則ち定王に近似す。而して定王〔の名前が挙がること〕が尤も多し……（『鮎埼亭集外編』卷二十九・題跋三・「題戾園疑跡二」）。

①『明季南略』（卷之三・「三皇子紀」条）・『明季甲乙兩年事略』（第二卷・「二卷異同補」条）に、順治八年に逮捕された自称三太子（定王）が、僧侶であった時に「號は雲庵、或いは一鑑と稱し、或いは起雲と稱す」とある。

すると、崇禎帝の太子というと、すぐに「定王」と結びつけられやすかったのかもしれない。

に定王を即位させ、人々は欣喜した」という情報を得たと伝えてきたが、後に「南京の人たちは、偽太子の王之明を擁立したものの、文武百官はひとりとして拝謁に来たものはいなかった。忻城伯の趙之龍は、清政権の軍の到着を待って講和し、方策を決めて擁立のことは行ないたい、と人々に訓示した。そして東郭門で小舟に乗って、待ち受けた」と分かった。また、この下僕の岳父は、福王弘光帝は安徽廣徳に到着したとも伝えてきたが、これも誤りであった、という。

江蘇太湖洞庭山の角里に避難していた薛栄（字は諧孟、号は歳星・米堆山和尚。江蘇武進の人。崇禎四年辛未科（一六三一）二甲三十名の進士）も、南京にいた太子（獄に拘留されている自称太子の「王之明」）を「定王」だとして、その「定王」を帝位させたという伝聞を記している。『薛諧孟筆記』の「六月十一日記」条につぎのようにいう。

①角里に僻居すれば、耳聞 何に従りて覈實（事実を確かめる）せん。即ち定王の一事の如きは、「真」なりと云う者有り、「贗」なりと云う者有り、南都に在るは「贗」と爲し北營（清の軍営）に在るは「真」と爲すと云う者有り。南都の諸臣 弘光帝の去りし後に立つる所と□（一字空格）營（清の軍営）の豫王の旁に在るは、豫王に向かいて投降する諸臣の親しく指して崇禎の第三子と爲せば、即ち係れ一人なりと云う者有り。茲れ天石の晤いし一りの入山せし金壇の人の述ぶる所なり。後の一段と近しと爲す。而して顛末 較や詳し。據りて云う、五月初十日□（一字空格）弘光帝 猶お召對するも、舉朝 震慄し、半語も吐く能わず。是の日の午刻、忽ち駕帖（皇帝じきじきの命令書）を傳え、斬決（斬刑に処す）する所有れば、紛紛として定王と爲すかと疑う。已にして又た帖の出る有りて前帖を追回（撤回）す。咸な言う、空中に雷撃ありて、驚悔して之を追うなり、と。十一日五鼓、朝門 啓かず。司禮監門も亦た啓かず。提塘官（中央官庁と地方官との連絡文書を管理する武官）有りて排闥（推し開く）して入れば、則ち已に空しく人無し。内使（皇帝の詔令を伝達する宦官）を執えて訊ぬ。〔そして〕帝 宵分を以て行き、従行する者は、寥寥たる十餘人なりて、廣徳の山路の徑を取りて武林に達せんとすると知る。羣臣 惶懼し、錦衣の獄を叩（攻撃）し、定王を奉じて帝位に西殿に即かしむ。又た三日にして〔清朝の〕豫王 至る。忻城伯の趙之龍 始めて迎降（敵を迎えて投降する）の議を倡う。錢謙益・王樸・蔡奔琛・李霑等 陸續として出でて謁す。豫王 曰く、先帝の公主 已に吾國に歸す。王子は是れ定王なれば、是れ國舅なり。何ぞ出でて見えざらんや、と。羣臣 遂に〔定〕王を奉じて出だす。故に營中に侍坐す。福王 若し在れば亦た當に王に封ずべしの説有り。適たま黃虎山（黃得功）の討檄 至る。豫王 出降（投降）する者の反側（ころころと変化する）を疑えば、入城して恣に誅戮を行なう。此の人 亦た倉皇（慌てふためく）に出奔す。途中に予（薛栄）が同年の王士鏞（江蘇金壇の人。崇禎四年辛未科（一六三一）三甲二六〇名の進士）を悞まり指して馬士英と爲す者有りて、幾んど拳毆の下に斃れんとす。後に其の悞まりなるを知り、乃ち免る。嗟乎、宋の南渡の時、侍郎の黃鶚 黃潛善に代わりて刃を受く。昔より然るなり六月十一日記（『薛諧孟筆記』上冊・四十二葉～四十三葉・

「六月十一日記」条)。

①角里:角里は即ち角頭なり。洞庭西山に在り。漢の角里先生^{カクリ}の居る所なり。「史記正義」(「留侯世家」の「天下有四人」条の「正義」の佚文)に「太湖中の洞庭山の西南に祿里村有り」と(崇禎『吳縣志』卷之六・古蹟・「角里」条)。

角里に蟄居しているので、伝聞は何から事実を確かめることができるのだろうか。南京の定王の事は、「真」だという者もいるし、「贗」だという者もいる。また、南京にいる者は「贗」であり、清の軍営にいるのが「真」だという者もいる。福王弘光帝が逃げ出した後に立った太子と清の軍営の豫王のそばにいる太子は、豫王に投降した官僚たちが指さして崇禎帝の第三子だとしていることから、[南京にいた太子と清の軍営にいる太子とは]同一人物だという者もいる。これは、[私(薛案)の友人の]天石が出会った[太湖西洞庭山]に避難してきた金壇の人の伝聞である。後に述べる伝聞と近い。しかし、顛末は後に述べる伝聞がやや詳しい。それによればつぎのようになる。五月十日、福王弘光帝は臣下を召し出して政策を論じていた。宮廷中、恐れおののき、僅かな言葉ですら言上できなかった。この日の午後、突然駕帖(皇帝じきじきの命令書)が伝えられ、斬首があるとされたので、混乱して処刑されるのは「定王(獄に拘留されている自称太子の「王之明」)」ではないかと疑われた。しばらくして別の命令書が出て、前のものは撤回された。それについて皆は、空で雷撃がしたために、後悔して撤回させたのだと言っていた。十一日の夜明け、宮中の門が開かれず、司禮監の門もまた開かれなかった。提塘官(中央官庁と地方官と連絡文書を管理する武官)が、門を推し開いて入れば、閑散として人がいなかった。内使(宦官)をつかまえて訊ねた。そうすると、福王弘光帝は宵に出て行き、随行するものは僅か十数人であり、安徽廣徳^{やまみち}の山路から浙江杭州に至ったとわかった。群臣たちは恐れおののき、錦衣の獄を攻撃して、獄に繋がれていた「定王(自称太子の「王之明」)」を推戴して西殿において即位させた。そして三日たって、清朝の豫王がやってきた。忻城伯の趙之龍は、ここで始めて投降の提案を行ない、錢謙益・王樸・蔡弈琛・李霽などは、陸續として出で行って豫王に拝謁した。豫王は「先帝(崇禎帝)の王女はすでにわが清朝にとついだ。王子が「定王」であるのならば、我が国家の国舅となる。どうして出て面会にこないのか」という。群臣は、「定王(自称太子の「王之明」)」を担ぎ出してきた。そういうわけで、清の軍営にいたのである。そして、福王弘光帝がもしもいるのならば、王に封ずるべきだとの話もあった。たまたま、黃得功の檄文がもたらされたため、豫王は投降してきた者たちがころころと心変わりするのを疑い、南京に入城して好き勝手に殺戮を行なった。そのため、話を伝えてくれた人は、慌てふためいて逃げ出した。その途中で、私(薛案)と同年に進士となった「王士禛(江蘇金壇の人。崇禎四年辛未科(一六三一)三甲二六〇名の進士)」を誤って「馬士英」だといったものがいたため、「王士禛」は、殴り殺されるところであったが、間違いであることが分かり、助かったという現場を見た。宋が南渡した際に、侍郎の黃鶚が黃潛善に間違えられて被害にあった。昔からこのようなことがあったのだ、と薛案はいう。

さて、福王弘光帝が五月十一日に南京から逃亡し、十四日に清軍が南京に至るまでの間、南京を清朝に明け渡し投降することを決心していた趙之龍⁴⁾が中心となって、治安維持につとめる。では、その数日間、南京の太子（自称太子の「王之明」）はどのような状況になっていたのであろうか。

そもそも、三月一日に自称太子が南京に現れてから、福王政権内部では、たびたび尋問が行われ、駙馬都尉の王昺の姪孫の「王之明」であると断定される。南京にいた官僚たちは、李清（字は心水、号は映碧、晩年は天一居士と号す。揚州興化の人。明・萬曆三十年〔一六〇二〕～清・康熙二十二年〔一六八三〕。崇禎四年辛未科〔一六三一〕三甲一百八十六名の進士）が述べるように、「ニセモノ」だと認識していた。ただし、民間では、「ホンモノ」だと信じられていたのである。

偽太子の「王之明」 屢しば訊（審問）され、百官 皆な偽なるを知る。然れども民間猶お嘖嘖（議論紛紛）として真なりとするがごときなり（『三垣筆記』附識下・弘光）。

また、『甲乙事案』においても、

謹みて按ずるに、當時の太子の一事 朝廷の上は、皆な「偽なり」と曰い、草野の間は皆な「偽に非ず」と曰う。在内の諸臣は、皆な「偽なり」と曰い、在外の諸臣は、皆な「偽に非ず」と曰う……（『甲乙事案』卷下）。

とのべ、政権の上層部と南京の官僚は「ニセモノ」だと言い、民間の人たちと地方にいる官僚は「ホンモノ」だと言ったという。

このように、宮廷の外では、ひとびとが、なかなか「ニセモノ」だと信じなかったために、処分を下すことができず、獄に繋がれたまま、福王弘光帝が南京を出奔する五月十一日になってしまう。

五月十一日早朝に、清朝の軍が南京に逼ったと聞いた福王弘光帝が南京を逃げ出してしまうと、人々が獄に赴いて太子（自称太子の「王之明」）を迎える。その状況を『江南聞見録』は、つぎのように伝える。

〔五月十一日〕各門 既に閉じ、百姓數百人 中城（城内）の獄に往き、太子を擁して馬の上に上せ、西華門より宮に入る。〔自称太子の「王之明」は〕尙お未だ櫛沐（髪を結い、顔を洗う）せず。圜（牢獄）中の人 悉く自ら出づ。奸悍なる兵民 機に乗じて大内（皇宮）に入り、金帛を搶奪（争奪）すること甚だ多し。大半は強き者の得る所と爲る。太子 百姓の爲に擁入せらると雖も、文武の元老 一の至る者無し。百姓 遂に相國の王鐸を擒えて、中城（城内）〔の監獄〕に禁（監禁）し、鬚を抜き髪を擗（抜き取る）し、其の毆打を極む。旋いで其の家に入り、搶刦（刦）して一空（からっぽ）たり。○兩月以來、天氣

陰霾（どんよりする）凄慘（凄凉）にして、日色 罕見す。〔しかし〕是の日、天は清み日は朗らかにして、晝夜 明朗なり（『江南聞見録』一卷・「弘光元年（順治二年）五月十一日」条・二葉：都城琉璃廠留雲居士排字本『明季稗史彙編』所收本による。以下同じ）。

4) 趙之龍については、『清史列傳』の「貳臣傳乙」につぎのように述べる。

趙之龍、安徽虹縣の人。七世の祖は〔趙〕彝、明・永樂中に功を以て忻城伯に封ぜらる。數傳して其の父の〔趙〕世新に至る。〔趙〕世新 泰昌元年（一六二〇）に卒す。〔趙〕之龍 襲職す。崇禎の時、流賊 四起し、莊烈帝（崇禎帝）〔趙〕之龍に命じて南京を守らしむ。李自成 京師を陥れ、福王 南京に立つ。大學士の馬士英 擁戴の功を挟み、内には〔趙〕之龍・勳臣の朱國弼・劉孔昭 并せて鎮臣の劉澤清・劉良佐等と結び、朝政を擅にす。尚書の張慎言 舊の大學士の吳姓・鄭三俊を薦めるも、〔趙〕之龍等の嫉む所と爲る。一日、朝（朝見）罷り、〔趙〕之龍等 羣がりて廷に誦し、〔張〕慎言及び〔吳〕姓を指して奸黨と爲し、叱咤（怒声）殿陛（御殿前の石階）に徹く。〔そして〕地に伏して痛哭して謂う、〔〔張〕慎言 文臣を擧用し、武臣に及ばず〕と。鬪争（やかましく争う）して已まず。又た疏もて〔張〕慎言を劾し、極めて〔鄭〕三俊を誣る。且つ謂う「〔張〕慎言 〔福王を南京に〕迎立するの時、難離（難癖をつけてこぼむ）し貳心を懷く。〔張慎言が推薦した吳〕姓の陛見を寢むを乞い、命じて〔張〕慎言の君を欺くの罪を議せよ」と。〔張〕慎言 遂に乞休（辭職を願い出る）す。本朝の順治二年（一六四五）、豫親王多鐸 兵もて江南に下り、福王 擒に就く（捕らえられる）。〔趙〕之龍 明の魏國公の徐胤爵・保國公の張國弼・隆平侯の張拱日・臨淮侯の李祖述・懷寧侯の孫維城・靈璧侯の湯國祚・安遠侯の柳祚昌・永昌侯の徐弘爵・定遠侯の鄧文固・項城伯の常應俊・大興伯の鄒存義・寧晉伯の劉胤極・南和伯の方一元・東寧伯の焦夢熊・安城伯の張國才・洛中伯の黃九鼎・成安伯の郭祚永・駙馬の齊賢元・大學士の王鐸・尚書の錢謙益・侍郎の朱之臣・〔侍郎の〕梁雲構・〔侍郎の〕李緯・翰林の程正揆・〔翰林の〕張居・給事の林有本・〔給事の〕陸朗生・〔給事の〕王之晉・〔給事の〕徐方來・〔給事の〕莊則敬及び都督・副將、并せて城内の官民 迎え降る。〔趙〕之龍 將に出でて降らんとし、戸部に入りて庫に封ずるに、郎中の劉成治 憤りて之を撃つ。〔趙〕之龍 逃れ去る。〔順治〕三年（一六四六）六月、〔趙〕之龍及び〔徐〕胤爵等 疏もて明の鐵券（爵位を有していることを証明する鐵券）を繳（交付）さる。〔順治〕五年（一六四八）八月、投誠の功を敘し、〔趙〕之龍に三等男爵を授け、漢軍鑲黃旗に隸せしむ。尋いで老病を以て致仕す。〔順治〕十一年（一六五四）正月、卒す（『清史列傳』卷七十九・貳臣傳乙・「趙之龍」）。

① 熹宗「實錄」に、「〔泰昌元年（一六二〇）九月丁亥（十三日）〕勳衛趙之龍に忻城伯の祖爵を襲ぐを准す」（『大明熹宗達天開道敦孝篤友文章文襄武靖穆莊勤愍皇帝實錄』卷之一・「泰昌元年（一六二〇）九月丁亥（十三日）」条）。

② 『國榷』に「崇禎十六年十二月 丙寅（六日）、忻城伯趙之龍 守備南京とす」（『國榷』卷九十九・「思宗崇禎十六年十二月丙寅（六日）」条・六〇〇六頁）。

③ 『明季南略』（卷之一・「劉孔昭凌侮張慎言」条）では、誠意伯の劉孔昭が、主となったと伝える。

永樂帝に帰順して武功を立てた趙彝が忻城伯に封ぜられてから、代々爵位を継いで趙之龍にいたる。趙之龍は、代々爵位を継いできた人たちを用いたいと考えた崇禎帝に取り立てられて、崇禎十六年十二月六日に守備南京に任ぜられる。翌十七年五月十七日の福王政權の成立時に、馬士英に加担して京營戎政となる。そして、馬士英に対して批判的な高官を弾劾する。清朝の軍が南京にせまり、福王弘光帝が南京を逃げ出すと、南京の治安を維持し、清朝に投降するため連絡を取って南京を開城する。順治五年（一六四八）八月には、清朝に投降した功績を考慮し、三等男爵を授けられて、漢軍鑲黃旗に属した。順治十一年（一六五四）正月に亡くなる。

なお、李清の『三垣筆記』によると、崇禎帝はいろいろな人たちを登用したものの効果がないため、代々爵位を継いできた人たちを用いることにした。特に、襄城伯の李國楨と撫寧侯の朱國弼と誠意伯の劉孔昭と忻誠伯の趙之龍とに期待していたという。

上（崇禎帝）人を用いるも屢しば效あらず。又た侯伯を用いることを思い、曰く、「畢竟するに是れ我家の世官なり」と。其の最も屬意（期待する）する者は、襄城伯の李國楨〔割注：永樂の初めの李潛の裔、和州の人なり〕と撫寧侯の朱國弼〔割注：景泰の初めの朱謙の裔、夏邑の人なり〕・誠意伯の劉孔昭〔割注：劉基の裔、青田の人なり〕・忻誠伯の趙之龍なり。〔朱〕國楨は、後に殉難す（『三垣筆記』筆記中・崇禎）。こうして、趙之龍は、崇禎十六年十二月六日に守備南京に任ぜられる（『國榷』（卷九十九・「思宗崇禎十六年十二月丙寅（六日）」条・六〇〇六頁）による）。

そして、南京で福王政權が成立すると、崇禎十七年五月十七日に京營戎政を總督するように命ぜられる。

五月十一日、各門はすでに閉じられ、数百人の人々が南京城内の監獄に行き太子（自称太子の「王之明」）を擁護して馬に乗せて、西華門から宮中に入った。太子は、髪を結わず、顔を洗っていない。獄中の人々は、すべて自分から出て行った。凶暴な兵や民間人が、この機に乗じて宮殿に入り込み、多くの金品を奪い取った。それらの大半は、強いものの手に渡った。太子は、民衆に擁立されたといっても、文武の元老はひとりとして拝謁に来たものはいなかった。人々は、こういうわけで宰相（大學士）の王鐸を捕らえて、南京城内の監獄に監禁し、鬚と髪を引き抜き、殴り続けた。続いて、王鐸の邸宅に入り、余すところなく奪い取った。この二か月、天気はどんより荒涼として、日光はめったにささなかった。しかし、この日の天気は澄み切って太陽は明るく、日夜明朗であった、という。

王鐸が人々の標的になったのは、太子を「王之明」だと決めつけた張本人だと考えられていたためである。

『明季南略』では、この五月十一日の出来事を、つぎのように伝える。

〔五月〕十一日午刻、張監生 百姓千餘人を率いる有りて、王鐸を^{とら}擄えて中城（城内）の獄に到る、羣^{なぐ}之を毆り、太子と認めしむ。〔王〕鐸 云う「我に干^{あず}かる事に非ず。皆な馬士英の使うる所なり」と。衆 〔王〕鐸を咎うち、鬚髪 俱に盡く。太子 亟かに之を止め、中城（城内）の獄に禁（監禁）することを命ず。百姓 太子を擁して馬に^の上せ、西華門に入り、武英殿に至る。又た擁して西宮に至る。尚お未だ櫛沐（髪を結い、顔を洗う）せず。時に倉卒として備え無し、戲箱の中の翊善（贊善大夫：太子の事務官）の冠を取りて首に^{あたま}戴せ、武英殿に於いて登座す。羣 萬歲^{さけ}を呼ぶ。兩日（『明季甲乙彙編（四卷本）』と『明季甲乙兩年事蹟彙略（三卷本）』は「兩月」に作る）、天氣 陰霾（どんよりする）凄慘（淒涼）にして、日色 罕見す。〔しかし〕是の日、天は清^すみ日は朗^{あき}かなり。衆心 開悦す。各部寺署官の見ゆる者、俱に四拜の禮を行なう。大僚の亦た間々至る者有り（『明季南略』卷之四・「趙監生立太子」条：『四庫禁燬書叢書』史部第三十三冊所收鈔本『明季甲乙彙編（四卷本）』（卷三・四十六葉～四十七葉）と清初刻本『明季甲乙兩年事蹟彙略（三

こうして、趙之龍は南京の治安維持の役目を担うことになる。

〔崇禎十七年五月〕甲辰（十七日）、忻城伯の趙之龍に命じて京營戎政を總督さす（『南渡錄』卷之一・「崇禎十七年五月甲辰（十七日）」条：『國榷』（卷一百一・「思宗崇禎十七年五月甲辰（十七日）」条・六一〇一頁）・『明季南略』（『明季南略』卷之一・「諸臣陞遷推用」条）もほぼ同じ）。

ちなみに、全祖望は、ここで崇禎帝から期待された人たちのその後を記している。

思宗（崇禎帝） 文武の大臣 多く用うるに足らざるを以て、勛臣・戚臣と休戚（苦楽）を與同（共有）するを得んことを思う。嘗て曰く、「此れ究めるに吾家の世臣に屬するなり」と。〔崇禎十七年の〕甲申の變ありて、戚臣 尙お劉新樂・張惠安・鞏都尉有り、而して勛臣 之れ無し。李國禎 賊に降りて拷〔問〕を受けて死す。其の家 賂を南都に行い、之を殉節の列に置く。恥しきなり。南都は則ち趙之龍・劉孔昭 奸臣に朋附し以て其の國を亡ぼす。〔趙〕之龍 首に〔清朝の軍を〕迎附す。〔劉〕孔昭 遁れ去る……（『鮎埼亭集』外編卷六・碑銘三・「明施公子墓碣銘」）。

①この事情については、『鮎埼亭集』外編卷四十八・雜著一・「辨李國禎事」に述べられる。

卷本』(卷之三・二十七葉)もほぼ同じ)。

五月十一日午刻、監生の張某が庶民一千人あまりを率いて、王鐸を捕まえて、南京城内の監獄に行った。人々は、王鐸を殴り、崇禎帝の太子だと認めさせた。王鐸は、私の預かることではなかった。すべて馬士英の言いなりになったのだ、といった。人々は、王鐸をむち打ち、鬚や髪はむしりとられてほとんどなくなってしまった。太子(自称太子の「王之明」)は、すみやかに王鐸への乱暴を止めさせ、南京城内の監獄に監禁するように命じた。人々は、太子を擁護して馬に乗せて、西華門に入り、武英殿にやってきた。また擁護して西宮(帝の休息所)に着いた。太子(自称太子の「王之明」)は、まだ髪を結わず、顔を洗っていなかった。また、慌ただしくして、何の準備もなかった。そこで芝居道具箱から翊善(贊善大夫:太子の事務官)の冠を取り出して、頭にかぶせ、武英殿で玉座についた。人々は「萬歳」をさげんだ。この二日間は、天気はどんより荒涼として、日光はめったにささなかった。しかし、この日、天気は澄み切って太陽は明るかった。人々はよろこんだ。各部署の官僚たちで、来たものが四拜の丁寧な禮を行なった。高官も少しばかりやってきたものもいた、という。

『明季南略』では、太子(自称太子の「王之明」)の救出にむかった人々の数が「數百人」から「千餘人」に増える。また、『江南聞見錄』や『祁忠敏公日記』が文武の官僚の「一の至る者無し」と伝えるのと異なり、太子に拝謁にやってきた官僚がいたとする。また、王鐸を監獄に入れた状況も伝聞を異にする。

『國權』では、五月十一日のことをつぎのように伝える。

「五月壬辰(十一日)」巳刻(十時)、都人^{やくしや}獄に入りて太子を擁して入朝し、武英殿に登る。優人の翼善(贊善大夫:太子の事務官)の冠を以て之を奉る。羣^{やくしや}萬歳を呼び、「風調雨順(氣候が順調)にして國泰民安(國家太平、人民安樂)なり」と黄紙(公文書に使う紙)の上^{やくしや}に書き、「各城門の百姓 出ること母れ、兵 入ること母れ」と諭す。〔太子(自称太子の「王之明」)と関わりがあったために獄に繋がれていた〕高夢箕を獄より釋し、之に召見す。〔太子(自称太子の「王之明」)を「王之明」だと断定するのに尽力した〕王鐸 微服して遁れんとするに、眾 縛りて西華門に送る。毆詈 已まず。提督京營の忻城伯の趙之龍 暫く〔王〕鐸を中城(城内)の獄に移す。蓋し之を全うせんとすればなり。〔趙〕之龍 城門を禁(規制する)して出入を許さず。右都御史の李沾 微服して肩輿(轎子に乗る)し、〔庇護を〕求む。趙之龍 令箭もて〔護送し〕逸る^①を得。太子太保・都察院左副都御史の楊維垣 榜(立て札)して曰く、「天子の出巡して暫く避くるは、古今の常理なり。異と爲すに足らず。百姓 必ずしも驚懼し、小人の亂に乗じ、反って身家に累するを致さず。亦た必ずしも逃出せず。諒に避くるも亦た遠くする能わず。〔もしも遠くに行けば〕徒に兵盜の掠に供するのみ^②」と(『國權』卷一百四・乙酉弘光元年・「五月壬辰(十一日)」条・六二〇九頁)。

①『明季南略』卷之四・「十二日癸巳」条(鈔本『明季甲乙彙編(四卷本)』・清初刻本『明季甲乙

兩年事蹟彙略（三卷本）』も同じ）に「御史李沾肩輿微服詣趙之龍家求庇，之龍以令箭護送之出城（御史の李沾 肩輿微服して趙之龍の家に詣り庇〔護〕を求む。〔趙〕之龍 令箭を以て之を護送り城を出す）」とあるのによって補う。

②『江南聞見錄』一卷・「五月十一日」条に、「副院楊維垣硃示云，天子出巡，乃古今暫避常理，本院惟有盡忠殉國一死等語，已即自經（副院（都察院左副都御史）の楊維垣 硃示して，「天子の出巡するは，乃ち古今の暫く避くの常理なり。本院（楊維垣） 惟だ盡忠殉國有りて一死す」等の語を云いて，已にして即ち自經す）」とある。

五月十一日巳刻（十時）に，市民が監獄に突入し，太子（自称太子の「王之明」）を擁して宮殿に入り，武英殿に上った。そして，^{やくしや}優人のつかう翼善（贊善大夫：太子の事務官）の冠をささげ奉った。人々は万歳をさげび，「風調雨順（氣候が順調）にして國泰民安（國家太平，人民安樂）なり」と黄紙に書いて，「すべての城門では，人々は出てはいけない。兵士は入ってきてはならない」と諭した。そして，太子（自称太子の「王之明」）と関わりがあったために獄に繋がれていた高夢箕を出獄させ，拜謁させた。太子（自称太子の「王之明」）を「王之明」だと断定するのに尽力した王鐸は，目立たない服装で逃げ出そうとしたが，人々に縛り上げられ西華門に送り届けられたが，ずっと殴った罵られたりしていた。提督京營忻城伯の趙之龍は，王鐸を一時的に南京城内の監獄に入れた。保護するためであった。さらに，城門を規制して出入りを認めなかった。右都御史の李沾は，目立たない服装で轎子に乗って，庇護を求めてきた。そこで，趙之龍は軍の小旗を掲げさせて護送させて逃れさせた。太子太保で都察院左副都御史の楊維垣は，立て札をして「皇帝がお出かけになって，しばらく難を避けるのは，古今の常理である。異とするに足りない。皆は驚き恐れることがなく，悪い輩につけこまれて，その身や家財をまきぞえにしないようにせよ。また，かならずしも逃げ出さず，逃げ出しても遠くにゆくべきではない。もしも遠くに行けば徒に兵士や盜賊のえじきになるだけであるからである」と伝えた，という。

『國榷』は，治安維持を担当していた趙之龍が，王鐸を監獄に入れ保護したとする。また，太子を「ニセモノ」だと決めるのに尽力した李沾も趙之龍に庇護を求めて，助けられたと伝える。

南京城内の監獄から出た太子（自称太子の「王之明」）は，午前十時に武英殿に入る。そして，午後二時になって，西華門につぎのような内容の榜諭を出す。なお，この榜諭は，『國榷』のみ引用され，いまのところ他書には見あたらない。それによると，つぎのような内容であった。

〔五月壬辰（十一日）〕未刻（午後二時），太子 西華門に榜諭（榜文を掲示して民に諭すこと）して曰く，孤（王侯の自称） 臥薪嘗胆（『史記』越王勾踐世家）の身にして，^{なんじら}爾等臣民の擁護に頼りて宮に入る。〔このことは〕皇天の庇祐（保佑）の靈 太祖高皇帝の^{ほろ}涙びざるの功德に託して，茲の神器を守り，此の豊鎬（国都の南京）を保たんがためなり。敢えて貪天^①の心有るに非ざるなり。^{なんじ}爾等臣民 祖宗の先業・先帝の苦心を念い，各々忠心^{つく}を竭し，大物（天下）を保全し，下は亦た以て自ずから身家を安んず可きを願う。〔さらに〕忠義

の尙お草野に存し、城池固くして百姓安んずるを見て、余（自称太子の「王之明」）の心慰められんことを^{こいねが}庶う（『國権』巻一百四・乙酉弘光元年・「五月壬辰（十一日）」条・六二〇九頁～六二一〇頁）。

①『左傳』僖公二十四年に「竊人之財、猶謂之盜、況貪天之功以爲己力乎（人の財を^{ぬす}竊むを、猶お之を盜と謂う、況んや天の功を貪り以て己の力と爲すをや）」。

五月十一日の午後二時、太子（自称太子の「王之明」）は、西華門につぎのような榜文を掲示した。それはつぎのようなものであった。孤（王侯の自称）は、臥薪嘗膽（目的達成のため苦勞する：『史記』越王勾踐世家）の身で、汝たち臣民の擁護のおかげで宮中に入ることができた。このことは、皇天の庇祐（保佑）の靈が、太祖高皇帝の永遠の功德に託して、この神器を守り、この国都を保とうとされたおかげであろう。私（自称太子の「王之明」）は皇天の功績を盗むような気持ちはない。汝たち臣民が明朝の先祖（太祖高皇帝など）の功績や先の崇禎帝の苦心を思い、それぞれが忠なる心を尽くし、天下を保全し、下々のものがみずからその身や家を安んじることができ私（自称太子の「王之明」）は願っている。さらに、忠義というものが野に存在し、城の守りが固く、人々が安心する姿を見て、私（自称太子の「王之明」）の心が慰められることを切に願うものである、という。

そして、十二日午後に太子の諭が出される。『國権』によるとつぎのようなものであった⁵⁾。

癸巳（十二日）、太子（自称太子の「王之明」）諭して曰く、先皇帝（崇禎帝）^{おお}丕に大鼎を承け（『書經』君奭）、克く前猷（先王の謀劃）を振るう。凡そ茲の臣庶の同甘共苦（苦樂を共にする）するは、中外に播著し、聞知せざるは罔し。[しかし]昊天（蒼天）^{あわれ}弔まらず（『詩經』小雅・節南山に「不弔昊天（昊天に弔まれず）」）、親から禍に羅なるを憐れむ。凡そ血氣有るもの、裂眦（はげしく怒る）痛心（悲憤して痛恨）す。余小子（自称太子の「王之明」）宜しく殉國すべきを知るも、君父の仇は、共に天を戴かず（『禮記』曲禮上に「父之讎、弗與共戴天（父の^{あだ}讎は、^{とも}與共に天を戴かず）」）、皇祖の基業（政權）は、血汗（大変な努力のたまもの）にして易えるに非ずを思い、恥を忍びて奔避し、國冤（『江南聞見錄』・『明季南略』は「國恥」に作る）を雪がんことを圖る。幸いに諸々の勳戚・文武先生、^{あらかじ}豫^そめ^{すく}厥の振（救済）うこと莫きに^お隕^{おし}ちるを憐（吝）み、福藩を迎立し、共に恥を雪がんことを圖る。余（自称太子の「王之明」）惟だ先帝（崇禎帝）のみ是れ哀しむ。奔りて南都に^{いた}抵るは、實に大義を哭陳し、「身士卒より先に」（『史記』淮南衡山列傳）せんと欲すればなり。^{おも}意^{つな}わず巨奸 蔽障（阻隔）し、桎梏（手かせ足かせ）に嬰ぐを致す。余（自称太子の「王之明」）中城（城内）の獄に^{とらえられ}繫し時、毎に先帝を念い、日々慟絶（過度の悲しみで気を失う）せざるは無きなり。今日者、[福王弘光帝が、清政權の]兵を聞きて遠く避るは、「[寇 至れば] 去りて民の望みを爲^な」（『孟子』離婁^①下）せばなり。[しかし]、其れ高皇帝（太祖洪武帝）の陵寢・億萬の生命を如何せん。[そのために]余小子（自称太子の「王之明」）を維[持]す。諸々の勳舊・文武の諸臣の余（自称太子の「王之明」）

が高皇帝（太祖洪武帝）の三百年の鴻烈（大いなる功業）、先帝（崇禎帝）の十七載の舊

5) 『江南聞見録』に引くところも『國權』とほぼ同じである。

〔五月癸巳（十二日）〕午後、太子 傳示す。告示は硃を用いて標（はっきりさせる）し、日（日付を記す箇所）を空字に坐（そのままにする）す。〔そして〕黄紙もて之を書して曰く、泣予（自称太子の「王之明」）の先皇帝（崇禎帝）^{おお}丕^おいに大鼎を承（『書經』君奭）け、前猷（先王の計画）を克壯（宏大）にす。凡そ諸々の臣庶の苦しみを同じくするは、中外に播著し、宜しく知らざるは罔し。〔なのに〕胡ぞ天^{あわれ}弔^{あわれ}まず（『詩經』小雅・節南山に「不弔昊天（昊天に弔まれず）」）、^{あわれ}慘^{いたまし}くも奇禍^{ママ}に莊（『明季南略』は、羅）に作る）す。凡そ血氣有るもの、裂^{ママ}皆^{ママ}（裂皆：はげしく怒る）痛泣す。予小子（自称太子の「王之明」）

分（本分）としては宜しく殉國すべし。〔しかしながら〕君父の大仇、共に天を戴かず（『禮記』曲禮上）、皇祖の基業（政權）は、血汗（大変な努力のたまもの）にして易えるに非ずを以て、耻を忍びて奔避し、國耻を雪がんことを圖らんことを思う。予（自称太子の「王之明」）惟だ先帝のみ之れ哀しみ、奔りて南都に投ず。實に大義を哭陳し、「身ずから士卒より先に」（『史記』淮南衡山列傳）せんと欲すればなり。意わず巨奸 蔽障（阻隔）し、桎梏（手かせ足かせ）に^{つな}擥^{つな}ぐを致す。予（自称太子の「王之明」）城獄に幽せらるると雖も、毎に先帝（崇禎帝）を念い、一日に三痛三絶せざるは無きなり。如今者〔福王弘光帝が、清政權の〕兵を^{ママ}開^{ママ}きて遠遁するは、先ず「民の望みを爲す」（『孟子』離婁下）なり。〔しかし〕、其れ高皇帝の陵寢・億萬倉の性命を如何せん、泣予小子（自称太子の「王之明」）將に^{あまね}慙^{あまね}く勳舊・文武の諸先生に、予（自称太子の「王之明」）が高皇帝（太祖洪武帝）の三百年の鴻烈（大いなる功業）、先帝（崇禎帝）の十七載の舊恩を念い、予（自称太子の「王之明」）が振旅（凱旋する）を助け、此の顛沛^{たす}を扶けんことを請わん。何ぞ父老人民の圍抱して獄を出し、皇宮に擁入するを期せん。予（自称太子の「王之明」）^{いか}宮殿の披靡（事物が衰落する）し、祖業を^{ママ}跟^{ママ}踏^{ママ}さるるを見て、悲涕に勝えず。諸々の父老を奈んせん。焉んぞ知らん予（自称太子の「王之明」）重冤を負うことを。〔今は〕豈に稱尊（帝と称すること）して南に面するの日ならんや。謹しみて此れ在京の文武・勳舊の諸先生・士庶人等に布告するに、此の痛懷を念い、會議するを惜しむこと勿れ。予（自称太子の「王之明」）當に恭しく聽し、共に皇猷（教化）を^の抒^のぶべし。前日の予（自称太子の「王之明」）を識らざる^{うたが}の嫌^{うたが}い有るを以て、爾の經綸の兆（教）を惜しむこと勿れ。舊惡を念わず、諸々の訓典を垂れ、敢て「赦」を云うに非ず、惟だ即ち臨むに、予（自称太子の「王之明」）の逮ばざるを^{ママ}匡^{ママ}さんことを願う。此れを謹しめ、と（『江南聞見録』一卷・「五月癸巳（十二日）」条・三葉～四葉）。

『明季南略』では、この傳示を節略してつぎのように伝える。

午後、太子 皇城に粘示す。略に云う、先皇帝（崇禎帝）^{おお}丕^おい大鼎を承け（『書經』君奭）く。惟だ茲の臣庶の其の甘苦を同じくするも、胡ぞ天^{あわれ}佑^{あわれ}けず、^{あわれ}慘^{いたまし}くも奇禍^{つら}に羅なる。凡そ血氣有るもの、裂皆（はげしく怒る）痛心（悲憤して痛恨）す。泣予小子（自称太子の「王之明」）分（本分）としては宜しく殉國すべし。〔しかしながら〕君父の大仇、共に天を戴かず（『禮記』曲禮上）、皇祖の基業（政權）は、血汗（大変な努力のたまもの）にして易えるに匪ずを思い、〔そのため〕、垢を忍びて匿避し、國恥を雪がんことを圖らんとす。幸いに文武の先生 福藩を迎立すれば、予（自称太子の「王之明」）惟だ先帝のみ之れ哀しみ、奔りて南都に投ず。實に大義を哭陳せんと欲すればなり。意わず巨奸 障蔽（阻隔）し、桎梏（手かせ足かせ）に^{つな}擥^{つな}ぐを致す。予（自称太子の「王之明」）獄に幽せらるると雖も、日々痛絶せざるは無きなり。今、福王〔清政權の〕兵を^{ママ}開^{ママ}きて遠遁するは、先ず「民の望みを爲す」（『孟子』離婁下）なり。〔しかし〕、其れ高皇帝の陵寢を如何せん、泣予小子（自称太子の「王之明」）父老人民の圍抱して獄を出し、皇宮に擁入さる。予（自称太子の「王之明」）身ずから重冤を負えば、豈に稱尊（帝と称すること）して南面するの日ならんや。僅（謹）みて此れ在京の勳舊・文武の先生や士庶人等に布告し、此の痛懷を念い、會議するを惜しむこと勿れ。予（自称太子の「王之明」）當に恭しく聽し、共に皇猷（教化）を^の抒^のぶべし。前日に予（自称太子の「王之明」）を識らざる^{うたが}の嫌^{うたが}い有るを以て、爾の經綸の教を惜しむこと勿れ、と（『明季南略』卷之四・「十二日癸巳」条：『四庫禁燬書叢書』史部第三十三册所收鈔本『明季甲乙彙編（四卷本）』卷三・四十七葉と清初刻本『明季甲乙兩年事蹟彙略（三卷本）』卷之三・二十七葉～二十八葉もいくつかの文字の異同を除いて同じ）。

恩を念^もうを將^もつて、余（自称太子の「王之明」）が振旅（凱旋する）し、此の顛沛^{すく}を濟^{すく}を冀^{すく}う。何ぞ父老人民の圍抱して獄を出し、皇宮に擁入するを期せん。余（自称太子の「王之明」）宮殿の披靡（事物が衰落する）し、祖業の浪棄^{いか}さるを見て、悲泣に勝えず。諸々の父老の哭して宮〔中〕に留まることを勸める^{いか}を奈^{いか}せん。苦辭（堅く辭讓する）する能わず。嗟嗟父老、焉んぞ知らん余（自称太子の「王之明」）の身に重冤を負うことを。豈に稱尊（帝と称すること）して南面するの日なるか。謹しみて此れ京の内外に在るの勳舊・文武先生・士庶人等に布告し、此の痛懷を同じくし、會議するを惜しむこと勿れ、余（自称太子の「王之明」）當に恭しく聽し、共に皇猷（教化）を振るうべし。前日に余（自称太子の「王之明」）を識らざる^{うたが}の嫌^{うたが}い有るを以て、爾の經綸の教を惜しむこと勿れ、と（『國權』卷一百四・乙酉弘光元年・「五月癸巳（十二日）」条・六二一〇頁）。

①『孟子』離婁下に「寇至、則先去以爲民望。寇退、則反、殆於不可（寇 至れば、則ち先ず去りて以て民望（逃げる手本を示す）を爲す）。朱注に「爲民望、言使民望而效之（民望を爲すとは、民をして望みて之に效^{たら}わしむを言う）」。

五月癸巳（十二日）に太子（自称太子の「王之明」）は、以下のように論じた。先皇帝（崇禎帝）は、おおきな帝位を受け継がれ、前代からの計画を奮い起こされた。崇禎帝は、すべての臣民と苦楽を共にしたことは、中外に伝えられて、知らないものはいない。なのに天は、憐れみを下だそうとせず、先皇帝（崇禎帝）自身が禍を被ったことを憐れんだだけである。すべての生きているものは、激しく怒り悼んだ。私（自称太子の「王之明」）は、国に殉ずべきであることは理解していたものの、「君父の仇は、ともに天を戴かない」ことや、ご先祖の建てられた政権は、たいへんな努力のたまものであって変えてはいけなことを思い、恥を忍んで避難し、明朝に対するぬれぎぬをはらそうと考えた。幸いなことに勳戚や文武の官は、まえもって救いようがない状態に陥ることを惜しんで、福王を迎えて擁立し、一緒に恥を雪ごうとした。私（自称太子の王之明）は、ただ先帝（崇禎帝）のことだけを悲しんでいた。南京に奔走してきたのは、大義を泣きながら述べ、みずから兵士の先頭に立とうと望んだからである。なのに大奸のために隔離されて、手かせ足かせに繋がれることになった。私（自称太子の「王之明」）は、南京城内の獄に囚われている時も、いつも先帝（崇禎帝）のことを思い、日々悲しみのあまり卒倒していたのである。いま、福王弘光帝は、清政権の軍がやってきたと聞いて遠くに避難したのは、「〔敵が来ると先に〕退却して、人々に退却の手本を示した」（『孟子』離婁下）のである。しかしながら、太祖高皇帝（洪武帝）の陵寢や人々の生命をどうすればよいのだろうか。そのために、私（自称太子の「王之明」）を残されたのである。諸々の勳舊や文武の諸臣は、高皇帝（太祖洪武帝）の三百年にわたる大きな功績・先帝（崇禎帝）の十七年にわたる治世での旧恩を想うことから、私（自称太子の「王之明」）が凱旋して、この混乱を救うことを願ったのである。どうして、父老人や人々に囲まれて出獄し、宮中に担ぎ込まれるようなことを考えたであろうか。私（自称太子の「王之明」）は、宮中がむちゃくちゃになり、祖先の功績がみだりに捨て

去られるのを見て、悲泣にたえない。父老たちが泣いて宮中に留まるように勧めることをどうしようもなかった。堅く辞退することができない。ああ、父老たちは、私（自称太子の「王之明」）が、身に重冤（たいへんな嫌疑）を負わされていることを知っているのだろうか。それなのに帝と称して南面する日とすべきだろうか。そこで謹んで都の内外にいる勳舊やすべての臣民に以下のように布告する。この痛みを共有し、集まって「これから」の事を議論することを惜しまないでほしい。私（自称太子の「王之明」）は、恭しく拝聴し、共に皇猷（教化）をさかんにしようと思う。前に私（自称太子の王之明）を太子だと認めなかった嫌疑があったからといって、経綸の教えを出し惜しみしないでほしい。

『國權』によれば、この十二日に、太子（自称太子の王之明）は、群衆が騒ぎ立てるのを恐れたため、三度にわたって趙之龍を招く。だが、趙之龍は、応じなかった。それと同時に、越國公の劉孔昭を召し出す。宮中の外は騒がしく掠奪が行われたので、厳しく禁じた。そして、趙之龍は、「軍人や人々が落ち着いて持ち場を守り、太子（自称太子の王之明）を擁立したのは、國家にとってすばらしいことである。しかし北から軍隊がやってきているので、その軍が到着する時を待って、うまく交渉してから、ふたたび考えよう」と述べた。

是日、[太子（自称太子の王之明）] 慈禧宮に在り。使を遣りて趙之龍を召す。衆の擾るを懼ればなり。未だ至らず。三たび之を促がす。又た越國公の劉孔昭を召す。時に宮外^{かまびす}喧しく奪えば、嚴旨もて之を禁ず。趙之龍 榜示して「軍民 安守せよ。太子を擁立するは、此れ舉國の美事なり。第だ北より來るの兵あるに値り、到る日を俟ちて調安し、再び議せん」と……（『國權』卷一百四・乙酉弘光元年・「五月癸巳（十二日）」条・六二一〇頁～六二一一頁）。

おそらくこの趙之龍の榜示が、82 頁で検討した祁彪佳の日記に、

[弘光元年（順治二年）五月] 二十一日、……後に乃ち「南中（南方）の百姓 [偽太子の] 王之明を扶立し、文武官 一の至る者無し。忻城伯の趙之龍 百姓に諭して、『虜の來るを俟ちて講款（講和）し、既に方を定めて扶立の舉を爲さん』と。城の東郭門に至り小舟を以て候つ」と知る、と（『祁忠敏公日記』乙酉日曆・「弘光元年（順治二年）五月二十一日」条・十五葉：民國二十六年（一九三七）紹興縣修志委員會校刊本による）

と記されたものではないかと考えられる⁶⁾。

さて、正午になると太子（自称太子の「王之明」）は、武英殿に謁見し、皇帝の礼服と冠である袞冕を身に着け、宦官の馬進忠を従えて、官僚たちに早朝の参内を指示した。

6) 趙之龍の榜示に内容についてであるが、それぞれの書物によって記述が異なっている。

『江南聞見錄』では、

[五月十一日] 辰刻、忻城（趙之龍）出示安民して、「大駕 播遷し、本府 此の土を死守するも、已に大清の帥に致えて、自から裁酌（考慮して決定する）有り、爾民 必ずしも驚惶して徙避せざれ」等の語有り（『江南聞見錄』・「五月癸巳（十一日）」条）。

①『公羊傳』莊公三十二年の「吾將焉致乎魯國（吾將に焉んぞ魯國を致えんや）」に、何休は「致、與也」と注している。また、『公羊傳』昭公三十一年や『史記』吳太伯世家などに「致國」という用例があり、「國を讓る」という意味で用いられる。すると、この「致」は、「あたえる」・「ゆずる」の意味と理解してもいいのではないかと私は考える。なお、『啓禎記聞録』（『痛史』第十三種所収本・辛亥十一月初版）巻四の「播遷日記」は、『江南聞見録』と僅かな文字の異同はあるが同じものである。「播遷日記」の趙之龍の榜示は「大駕播遷、本府死守此土、以至大清大帥自有裁酌、爾民不必驚惶徙避（大駕 播遷し、本府 此の土を死守せんとす。〔そこで、〕 大清の大帥の至るを以て自から裁酌有り、爾民 必ずしも驚惶して徙避せざれ）」とあり、「已致」が「以至」となっている。「以至」であれば、「清朝の軍隊の到着を待って講和したい」という『國權』や祁彪佳の伝える意味と近いものになる。

とあるものが、『明季甲乙兩年事蹟彙略（三卷本）』では、

少間（少しして）、戎政の趙之龍 出示安民し「此の土は已に大清國大帥に致う^{あた}」の語有り（清初刻本『明季甲乙兩年事蹟彙略（三卷本）』巻三・二十七葉・「順治二年（弘光元年）壬辰（十一日）」条）。

①鈔本『明季甲乙彙編（四卷本）』では、「〔順治二年（弘光元年）〕壬辰（十一日）・・・少間（少しして）、戎政の趙之龍 出示安民し「此の土は已に大清國に屬す」の語有り」（『四庫禁燬書叢書』史部第三十三冊所收鈔本『明季甲乙彙編（四卷本）』巻三・四十六葉）とする。他書は、「致」字になっているので、「屬」字は、「致」字の誤寫の可能性もある。

となる。『明季南略』でも、

〔順治二年（弘光元年）壬辰（十一日）〕少頃（少しして）、忻城伯の趙之龍 出示安民して「此の土は已に大清國大帥に致う^{あた}」の語有り。各城門を閉ざして以て清兵を待つ（『明季南略』巻之四・「馬士英奔浙」条）。

となり、同じく『甲乙事案』でも、

弘光 既に出で、内外鼎沸し、百姓亂れ、内宮に擁入（集団で入る）して、御用の物件（品物）を搶掠（掠奪）、遺（棄てられた品物）街衢に落つ。文武 一時隱匿し、寓の封示する所を洗去す。男女 城を出でる者は蟻の如し、出でて復た返る者有り。次日、戎政の趙之龍 出示安民して、「此の土は已に大清國大帥に致う^{あた}」の語を云う有り（『甲乙事案』巻下・「弘光元年五月癸巳（十二日）」条）。

とする。そして、『罪惟錄』になると少し文言が異なる。

〔弘光元年五月〕、忻城伯戎政の趙之龍 出示安民して曰く、「此の土は已に上つられ北朝（清朝）に壽（保全）さる」と（『罪惟錄』附紀卷之十八・安宗簡皇帝・「弘光元年五月」条）。

ただし、福王弘光帝が南京を逃げ出した直後に「此の土は已に大清國大帥に致う^{あた}」というような告示が出されたとは、考えにくい。もしも、いきなりそのような告示があれば、城内はもっと混乱したと思われるが、そのような記録は見当たらない。また、『國權』には、この十一日の「大清國大帥に致う^{あた}」という趙之龍の告示は記録されず、十二日に内容が異なる趙之龍の告示が記録される。さらに、祁彪佳の五月癸巳（十二日）の日記にも、『國權』と似通った内容の告示を記している。

こうしたことからすると、『國權』が記録し、祁彪佳が五月二十一日の日記に記した、「軍民 安守して、太子を擁立す。此れ舉國の美事なり。第だ北より來るの兵あるに値り、到る日を俟ちて調爰し、再び議せん」というものが、この時に出された趙之龍の告示に近かったのではないかと、私は考える。

ここからは、あくまでも推測にすぎないが、福王弘光帝が逃亡するような混乱のなかでも、邸報のような公式文書が発行されていて、『國權』の撰者の談遷や祁彪佳はそれを見て、記録を残したのではないだろうか。他の書物は、『國權』や祁彪佳が見たであろう、もとの記録をみることができず、伝写されたものを参考にし、なおかつ南京を明け渡した趙之龍の行動を踏まえて、この五月十一日の時点で、「清朝に投降した」というような告示を趙之龍が出したと伝えたのではないだろうか。

なお、内容からみると、趙之龍の告示は、もともとは『國權』の伝える「第だ北より來るの兵あるに値り、到る日を俟ちて調爰し、再び議せん」というような内容であったのが、『江南聞見録』の「本府 此の土を死守するも、已に大清の帥に致えて、自から裁酌（考慮して決定する）有り」となり、『明季甲乙兩年事蹟彙略（三卷本）』・『明季南略』・『甲乙事案』などの「此の土は已に大清國大帥に致う^{あた}」と変化し、『罪惟錄』のようになっていったと私は推測する。

午刻（正午）、太子 武英殿に朝し、袞冕を御（帯びる）し、太監の馬進忠 侍し、百官に凌晨の早朝するを諭す（『國権』 卷一百四・乙酉弘光元年・「五月癸巳（十二日）」条・六二一一頁）。

午後二時に、太子（自称太子の「王之明」）が江南に現れたことを最初に福王政権に伝えた高夢箕や朱國弼、そして諸々の文武の官僚を召し出した。それぞれが防禦のことを提案し、隠し立てはなかった。

未刻（午後二時）、高夢箕及び保國公の朱國弼や諸々の文武を召す。各々防禦の事を議し、匿すこと毋し（『國権』 卷一百四・乙酉弘光元年・「五月癸巳（十二日）」条・六二一一頁）。『國権』では、この未刻（午後二時）の事項に続けて、つぎのようなことを記録している。

大學士蔡奕琛・兵部右侍郎李喬・禮部尚書錢謙益・兵部右侍郎梁雲構・都察院□□・應天府□□王道□・東寧伯焦夢熊等、戎政府（兵部の役所）に會す。朱國弼 焦夢熊を拳（こぶしで打つ）す。[焦] 夢熊 之を殺さんと欲す。蔡官治 微服して至るも、衆 冠帶に易えしむ。門を閉して諸臣を召して入朝さす。時に都人 市を罷む（營業を停止）す。[趙] 之龍 許さず、門を閉ざすを命ずる者 之を罪す。……[趙] 之龍 軍民に固守して、訛傳もて奔去する母れ、と示す（『國権』 卷一百四・乙酉弘光元年・「五月癸巳（十二日）」条・六二一一頁）。

大學士の蔡奕琛・兵部右侍郎の李喬・禮部尚書の錢謙益・兵部右侍郎の梁雲構・都察院□□・應天府□□王道□・東寧伯の焦夢熊等が、兵部の役所で會議した。朱國弼が焦夢熊を殴った。そのため、焦夢熊は朱國弼を殺そうとした。蔡官治は、平服でやってきたが、人々によって拝謁用の冠帶を着せられた。門を閉ざして、官僚を召し出して宮中に來させた。この時、商店は營業を停止していたが、趙之龍はそれを認めず、また門を閉ざすことを命じた者を罰した。趙之龍は、軍人や人々に持ち場を守り、流言を聞いて逃げ出さないように、と示した、とする。

この『國権』の記述によると、福王弘光帝が逃げ出した南京城内では、太子（自称太子の「王之明」）と関わりのないところで、官僚たちはいろいろと対策を検討していた。そして趙之龍は、城内の治安維持にあたっていたようである。

翌十三日には、文武の官僚が集まり議論がなされ、「安民城守」の布告が出されるが、太子擁立のことには触れなかったという。『江南聞見錄』では、つぎのようにいう。

十三日早、通濟門を開き、勇衛營^①の兵を放ちて入る。城中 乘間（この機会をとらえて）出る者 甚だ衆し。柵禁 稍々寛やかなり。店肆（商店）^① 頗（やや）開張（營業）する者有り。文武の臣僚 中府に集まり會議す。[そして]「安民城守」の各々告示の有るも等しからず。然れども俱に新主を立つの事に及ばず。太子 勅もて中城（城内）の獄神を蕭王に封じ、龍を周らす^{めぐ}匣^{はこ}におく。差官^う 奉けたる勅もて、二人して金棍を執り前^{すす}み行き、禁中（城内）[の獄]に至り、開讀すれば、兵馬司（官名：都の治安維持を担当する）素服もて之を迎う。其の居る所の室を以て改めて殿宇（宮殿）と爲す。旁晩、雲間（江蘇松

江縣)の貢生の徐瑜・蕭某 忻城(趙之龍)^{まみ}に謁える有りて、太子 宜しく即位すべしと面陳(じかに述べる)す。忻城(趙之龍) 立ちどころに叱りて之を斬る(『江南聞見録』一卷・「弘光元年(順治二年)五月十三日」条・四葉)。

①崇禎十四年の記録であるが、呉甞『憶記』(卷之三・「崇禎十四年」条)に「勇衛營在京營北、内員統領、兵近二萬、器甲旗幟煥然、飾觀而已(勇衛營は京營の北に在り、内員(宦官) 統領(統率)す。兵は二萬に近く、器甲(武器)・旗幟(各種の旗) 煥然(かがやいている)たり、飾觀(見栄をよくする)のみ)」。南都においても同様であったのかは、よくわからない。

②『甲乙事案』巻下に「頗」字を「稍」字に作る。すると「店肆稍有開張者(店肆 ^{すこ} 稍し開張する者有り)」となる。

十三日の朝、通濟門を開き、勇衛營の兵を呼びこんだ。南京城内では、この機会をとらえて脱出する者がたいへん多かった。柵禁は少しばかり緩められていた。商店は、すこし営業するものもいた。文武の官僚は宮中に集まり議論した。そして、「安民守城」の各々の告示をだしたが、内容が異なっていた。しかし、すべて新しい君主を立てることに言及しなかった。太子(自称太子の「王之明」)は、敕書を出して、自分が勾留されていた南京城内の監獄の獄神を「蕭王」に封じ、龍をめぐらせた箱に収めた。差官は授かった敕書を持って、二人で金の棍を執って南京城内の監獄に行き、敕書を読み上げた。兵馬司(官名:都の治安維持を担当する)が素服でそれを迎えた。太子(自称太子の「王之明」)の居住する部屋を改めて「殿宇(宮殿)」とした。晩になって、雲間(江蘇松江縣)の貢生の徐瑜と蕭某が、趙之龍に面会を求め、早速に太子(自称太子の「王之明」)は即位すべきであると直接に申し立てた。趙之龍はすぐに叱責し斬った、という。

『明季南略』では、十三日のことをつぎのように伝える。

[五月十三日]太子 王鐸を釋[放]せしめ、仍お以て大學士と爲す。又た方拱乾・高夢箕を獄より召し、並びに禮部侍郎・東閣大學士と爲す。二人 出獄し即ち逃ぐ。趙之龍 勇衛營の兵を召して入城さす。城中 乘間(この機会をとらえて)出る者 甚だ衆し。柵禁 稍々寛やかなり。店肆(商店) ^①頗(やや)開張(營業)する者有り。文武の諸僚中府に集まり會議す、太子に齒及(話が及ぶ)するに、皆な難色有りて曰く、「前日 幾番(何度)も云云(議論が錯綜する)たり。呂・張の禍を蹈む有るを恐れる者なり。然らざれば、弘光帝(『明季甲乙彙編(四卷本)』は「帝」字なし) 復た來れば、將に奈何とす」と。趙之龍 曰く、「此の中に復た新主を立て、[投降の交渉をするために清政權に送った]款使 北より歸れば、其れ何の辭 以て善後(後始末をつける)せん」と。衆 皆な之を然りとし、哄然(騒然)として散ず。各衙門「安民城守」を出示す。並びに新主を立てるの事に及ばず。……太子 勅もて中城(城内)の獄神を封じて王と爲す。差官 勅を捧げ、二人して行きて(『明季甲乙彙編(四卷本)』は、「前み行く」に作る)獄中に至り、勅文を開讀し、「崇禎十八年」と稱す。兵馬司(官名:都の治安維持を担当する) 素服もて之

を迎う。監生の徐瑜・蕭某 趙之龍に^{まみ}謁え、其の早に太子を奉じて即位させんことを勧む。
 [趙]之龍 立ちどころに叱りて之を斬る。差官 北軍の中より回る。[趙]之龍 即ち西宮に入りて太子に避位（即位を辞退する）を勧む（『明季南略』巻之四・「十三日甲午」条：『四庫禁燬書叢書』史部第三十三冊所收鈔本『明季甲乙彙編（四卷本）』巻三・四十八葉～四十九葉と清初刻本『明季甲乙兩年事蹟彙略（三卷本）』巻之三・二十八葉も二字の異同を除いて同じ）。

- ①『甲乙事案』巻下に「頗」字を「稍」字に作る。すると「店肆稍有開張者（店肆 ^{すこ} 稍し開張する者有り）」となる。

十三日に、太子（自称太子の「王之明」）は、王鐸を釋放し、そのうえに大學士とした。また、太子（自称太子の「王之明」）の事案に絡んで入獄していた方拱乾・高夢箕を監獄より召し出し、禮部侍郎兼東閣大學士に任命した。ところが二人とも出獄してすぐに逃げ出した。趙之龍は、勇衛營の兵を呼び寄せて入城させた。南京城内では、この機会をとらえて脱出する者がたいへん多かった。柵禁は少しばかり緩められていた。商店は、すこし営業するものもいた。文武の官僚は宮中に集まり議論したが、太子（自称太子の「王之明」）の問題に話が及ぶと、皆な難色を示し、「前日来、何度も議論が錯綜したことだ。呂・張の禍を招くことを恐れている。そうでなければ、逃げ出した福王弘光帝がもどってこられたら、いったいどうしたらよいのか」という。趙之龍は、「こうした状況で、新たに君主を立てて、[投降の交渉をするために] 清政権に送った使者がもどってきたら、どのようなことばで後始末をつければよいのか」という。皆はそうだとし、騒然として散会した。各々の役所は、告示をだして「安民守城」のことをのべたが、新しい君主を立てることは言及しなかった。太子（自称太子の「王之明」）は、敕書を出して、自分が勾留されていた南京城内の監獄の獄神を「王」に封じた。差官は敕書を捧げ持って、二人して獄中に行き、敕書を読み上げた。勅書には「崇禎十八年」と称していた。兵馬司が素服で出迎えた。監生の徐瑜と蕭某は、趙之龍に面会を求め、早速に太子（自称太子の王之明）を立てて即位させるよう勧めた。趙之龍はすぐに叱責し二人を斬った。使いが清軍から帰ってきた。趙之龍は西宮に入り、太子（自称太子の「王之明」）に即位を辞退することを勧めた、という。

『國權』では、十三日のことをつぎのように伝える。

甲午（十三日）、王鐸を釋[放]し、官は故の如くす。高夢箕・方拱乾 並びに禮部右侍郎兼東閣大學士と爲す。中城（城内）の獄神を封じて王と爲す。勅文に「崇禎十八年」と稱す。或いは云う、[高]夢箕・[方]拱乾 出獄して俱に通ぐ、と。諸臣 中府に集まり擁戴の事を會議するに、皆な難色有り。曰く、「前に累りに訊（尋問）するも未だ明らならず。且つ弘光帝 復た來れば奈何せん」と。趙之龍 曰く、「此の中に復た新主を立て、[投降の交渉をするために清政権に送った] 款使 北より歸れば、其れ何の辭 以て善後（後始末をつける）せん」と。衆 乃ち各々散ず。趙之龍 勇衛營の兵を召して入城

さす。監生の徐瑜 趙之龍に早に太子を奉じて即位するを勧めれば、[趙之龍]之を殺す。[李沾 既に去り(『明季甲乙彙編』卷之三によって補う)] 李喬 自から都察院左都御史と爲る。遣使 清營より回^{かえ}る。忻城伯の趙之龍 即ち西宮に入りて、太子に避位を勧む(『國權』卷一百四・乙酉弘光元年・「五月甲午(十三日)」条・六二一一頁)。

十三日、太子(自称太子の王之明)は、王鐸を釋放し、もとのままの大學士とした。また、太子(自称太子の王之明)の事案に絡んで入獄していた高夢箕・方拱乾を禮部侍郎兼東閣大學士に任命した。太子(自称太子の王之明)が捕らえられていた南京城内の監獄の獄神を王に封じた。その勅書では、「弘光元年」を「崇禎十八年」と改めて称させた。別に、高夢箕・方拱乾の二人はともに出獄してすぐに逃げ出したとも伝わっている。諸々の官僚は宮中に集まり、太子(自称太子の王之明)の推戴を議論したが、皆な難色を示した。そして、「前に何度も尋問したもののはっきりしていない。さらに逃げ出した福王弘光帝がもどってこれたら、いったいどうしたらよいのか」という。趙之龍は、「こうした状況で、新たに君主を立てて、[投降の交渉をするために] 清政權に送った使者がもどってきたら、どのようなことばで後始末をつければよいのか」という。皆はそこでそれぞれ散会した。趙之龍は勇衛營の兵を呼びこみ入城させた。監生の徐瑜が、趙之龍に、早速に太子(自称太子の王之明)を立てて即位させるよう勧めたので、趙之龍はこれを殺した。李沾が去ってしまったので、李喬が自分から都察院左都御史となった。使者が清の軍營から帰ってきた。趙之龍は西宮に入り、太子(自称太子の王之明)に即位を辞退することを勧めた、という。

さらに陸圻^{りくき}(字は麗京、又の字は景宣、号は講山。浙江錢塘の人。明の貢生)の『織言』に、つぎのようにある。

甲午(十三日)、太子 王鐸を釋[放]せしめ、仍お以て大學士と爲す。又た方拱乾・高夢箕を獄より召し、並びに禮部侍郎・東閣大學士と爲す。三人 清師の[南京に] 壓境(接近する)するを以て俱に職に就かず。是の日、文武の諸臣 議して、太子を迎立するに及べば、皆な難色有り、且つ曰く、「射鉤の嫌(積もる怨み:『左傳』僖公二十四年)を論ずる無きも、今上(福王弘光帝) 尙お 黃將軍(黃得功)の營に在りて、百里ならず。即ち復た來れば、奈何せん」と。時に趙之龍 久しく大清と降るを約す。[趙]之龍 曰く、「即ち今上(福王弘光帝)を論ずる無し。倘し[投降の交渉をするために清政權に送った]款使 北より歸れば吾屬を責む。更に新主を立てれば、其れ何の辭 以て善後(後始末をつける)せん」と。衆 皆な之を然りとし、即ち散去し、太子を奉ずる者無し。太子 勅書もて中城(城内)の獄神を封じて王と爲す。差官^う 奉けたる勅もて前^{すす}み行きて獄中に至り、勅を讀みて、「崇禎十八年」と稱す。兵馬司(官名:都の治安維持を担当する)素服もて之を迎う。監生の徐瑜・劉生・蕭生の輩 [趙]之龍に謁^{まみ}え、其の共に主を戴かざるを責む。[趙]之龍 立ちどころに之を斬る。差官 北軍より回^{かえ}る。[趙]之龍 即ち西宮に入りて太子に避位(即位を辞退する)を勧む(『織言』中・「南京太子」条)。

十三日、太子（自称太子の王之明）は、王鐸を釋放し、もとのままの大學士とした。また、太子（自称太子の王之明）の事案に絡んで入獄していた方拱乾・高夢箕を獄中から召し出し、禮部侍郎兼東閣大學士に任命した。三人とも、清朝の軍が接近していることから、任命をうけなかった。この十三日に文武の官僚は、議論して、太子（自称太子の王之明）の推戴問題になると、皆な難色を示した。なおかつ、「太子（自称太子の王之明）の我々に対する射鉤（積もる怨み）の嫌疑について議論する以前に、今上（福王弘光帝）は黄（黃得功）將軍の軍營におられます。百里も離れていない。またお戻りになったらどうすればよいのか」という。この時、趙之龍は、以前から清政權に投降することを申し出ていた。そのため、趙之龍は、「今上（福王弘光帝）については問題としないまでも、[投降の交渉をするために] 清政權に送った使者がもどってきたら、われわれを詰問するであろう。さらに新たに君主を立てたとしたら、どのようなことばで後始末をつければよいのか」という。皆は納得し、散会し、太子（自称太子の王之明）を奉じようとする者はなかった。太子（自称太子の王之明）は、敕書を出して自分が捕らえられていた南京城内の監獄の獄神を王に封じた。差官は敕書を持って、獄にやってきた。敕書を読んで「崇禎十八年」と称していた。兵馬司（官名：都の治安維持を担当する）が素服で出迎えた。監生の徐瑜・劉生・蕭生の輩が、趙之龍に面会を求め、共に君主を擁立しないことを責めた。趙之龍はすぐにこれらを斬った。使者が清の軍から帰ってきた。趙之龍は西宮に入り、太子（自称太子の「王之明」）に即位を辞退することを勧めた、という。

『織言』では、太子（自称太子の王之明）についての議論を記した後に、「太子を奉ずる者無し」と付け加えられている。

さて、『國權』・『織言』・『明季南略』とともに、『甲乙事案』においても、

太子 勅もて中城（城内）の獄神を封じて王と爲す。差官 勅を捧じ二人もて前導し獄中に至る。勅文を開讀するに「崇禎十八年」と稱す。兵馬司 素服もて之を迎う（『甲乙事案』卷下）。

と述べ、太子（自称太子の王之明）が、自分が捕らえられていた南京城内の監獄の獄神を王に封じた敕書に「崇禎十八年」と称していたと伝える。こうしたことは、福王弘光帝を否定して、崇禎帝の帝位を、直接この太子（自称太子の「王之明」）が承けたことを示しているのであろう。

このことについて、全祖望（字は紹衣、号は謝山。浙江鄞山の人。康熙四十四年（一七〇五）～乾隆二十年（一七五五）。乾隆元年丙辰科（一七三六）三甲三十六名の進士）は、「題戾園疑跡一」において、つぎのように述べる。

……『紀畧』の言う所に據るに、其の出獄して宮に入るの後、人を遣りて勅を持して南都の獄神を封じて王と爲す、と。則ち居然（あきらかに）として自から以て天子と爲す。其の愚にして妄なること何如……（『鮎埼亭集外編』卷二十九・題跋三・「題戾園疑跡一」）。全祖望は、太子（自称太子の「王之明」）のこの行為を、あきらかに自分を「天子」だとして行ったものだと批判するのである。

したがって、十一日から十三日にかけて、この太子（自称太子の「王之明」）は、帝位に即位したようにふるまっていたと考えられる。

ここからすると、五月二十日に、蘇州の町中に「南明政権の」詔が貼りだされ、「南京では定王が擁立された」という記録は、以上のような状況下でもたらされたものだと考えられる。

ただ、すぐにこの太子（自称太子の「王之明」）は、清政権との和平交渉をまとめた趙之龍によって、即位を辞退するように勧められる。

ほとんどの記録は、趙之龍が太子（自称太子の「王之明」）に即位の辞退を勧めたと述べるだけであるが、陸圻の『織言』には、

十三日、忻城伯〔の趙之龍〕 近侍の鐵騎を遣りて砲を用いて大内を破らんと欲す。蓋し〔自称太子の〕王之明を除くに急なればなり（『織言』中・「此不當要」条）。

とある。

そして、李清は、「〔王〕之明を執えて獄に繋ぐ」と記す。

……是（福王が南京を逃げ出す）に至り、二三の劣衿 首と爲り亂民を率いて之（自称太子の王之明）を擁立す。御殿（朝に臨む）すること三日、又た群 趙之龍の寓に往き、百官に入朝するを邀む。〔趙〕之龍 手づから首と爲るの劣衿三人を斬れば、乃ち退く。〔王〕之明を執えて獄に繋ぐ……（『南渡録』 卷之六・「五月壬辰（十一日）」条）。

さらに、『南渡録』に、数日後に趙之龍が、豫王から太子（自称太子の「王之明」）はどこにいるのかとたずねられて、王之明を獄中から連れ出してきたと述べている。

戊戌（十七日）、北兵 進みて皇城を守る。

豫王 先ず兵千餘を遣りて、禮部尚書の錢謙益等に命じて宮を捜さしむ。方に入りて、坐定まり、即ち問う、「崇禎の太子は安くに在りや」と。乃ち王之明を獄より出し、與に并坐（相挨着坐）し。諸臣に指語して曰く、「此れ真の太子なり」と……（『南渡録』 卷六・「五月戊戌（十七日）」条：『三垣筆記』もほぼ同文）。

こうしたことからすると、趙之龍は、清軍の入城前に、太子（自称太子の「王之明」）を捕らえて、監獄に繋いでいたと考えられる。

さて、清朝の軍隊の進駐の後、太子（自称太子の「王之明」）は、豫王と面会し、厚遇される。そして、福王弘光帝が豫王の軍営に連行されてくると、面会する。

『織言』によれば、太子（自称太子の「王之明」）が福王弘光帝に面会した後、豫王は、福王弘光帝が選んでいた淑女をこの太子（自称太子の「王之明」）の配偶者とし、九月六日、北京に連行したという。そして、翌順治三年四月九日に福王・潞王などとともに処刑されたと伝える。

〔順治二年五月〕十六日、豫王 文武等官に「明の太子 當に一縣^{あた}を予え、封じて以て先朝の祀を主らしむべし」と諭す。旋いで宏（弘）^{ママ}光の選ぶ所の淑女を以て之に配す。〔順治二年五月〕九月初六〔日〕、豫王 北に還るに、復た太子を挟みて與俱^{めあわ}にするを命ず。丙戌（順治三年：一六四六年）四月初九日、蠟丸飛書を得て〔明の〕諸王 同謀して清を

せんとすと告ぐる者有り。同日、太子・^{ママ}宏（弘）光・潞王・秦王等の九王 市に戮せらる。魯王監國 遙かに「自称太子の「王之明」に」悼皇帝と諡す（『織言』中・「南京太子」条）。また、『明季甲乙彙編（四卷本）』も、つぎのようにいう。

豫王 弘光の選する所の淑女を以て太子に^{めあわ}配す。數月後、豫王 北行し、太子及び弘光之に随う。潞王も尋いで亦た北に至る。後、俱に凶問あり。遺臣 奉けたる魯王監國の令もて、「自称太子の「王之明」に」諡して「悼皇帝」と曰い、弘光を「赧皇帝」と曰い、潞王を「潞閩王」と曰う有り（『四庫禁燬書叢書』史部第三十三冊所收鈔本『明季甲乙彙編（四卷本）』卷三・五十五葉：清初刻本『明季甲乙兩年事蹟彙略（三卷本）』卷之三・三十二葉も同文）。

浙江古籍出版社が一九八八年に出版した明末清初史料選刊本の『南渡錄』（何槐昌氏点校）には、日付を順治三年五月とするが、福王などとともに処刑されたと伝える。

〔隆武〕二年（順治三年〔一六四六〕）五月、帝（福王） 燕京に害に遇う。潞王等の十王も俱に殺さる。王之明も亦た伴に死す（明末清初史料選刊本『南渡錄』卷之五・「隆武二年五月」条・二八〇頁）。

なお、江蘇古籍出版社が一九九九年に出版した『南明史料（八種）』所収の『南渡錄』（黃倣成氏点校）の「隆武二年五月、帝（福王） 燕京に害に遇う」条では、「傳聞」として、王之明は、隠しうずめておいた大砲の暴発で福王弘光帝とともに亡くなったと記す。

隆武二年（順治三年〔一六四六〕）五月、帝（福王弘光帝） 燕京に害に遇う。

〔以下のように〕傳聞す。帝（福王弘光帝） 初め燕〔京〕に至り、潞・周の諸王及び世子等と館を同じくす。其の博飲（賭博と飲食）に任せて楽しみを爲す。而して密かに大砲を地に瘞む。忽ち一夕に火 發し、灰燼たりて遺す無し。〔自称太子の〕王之明も亦た伴に死す（『南明史料（八種）』所収『南渡錄』卷之六・「隆武二年五月」条）。

『國權』には、日付は異なって五月三十日とするが、淑女の□□氏を太子（自称太子の王之明）の配偶者とし、北京に連行したとのみ記録する。

〔順治二年（弘光元年）五月〕辛亥（三十日）、豫王 我が〔福王政權の〕淑□□氏を以て□太子に^{めあわ}配せ、北行す（『國權』卷一百四・「弘光元年五月辛亥（三十日）」条・六二一七頁）。

さて、福王政權下で南京工科都給事中（崇禎十七年六月七日の時点：『國權』卷一百二・思宗崇禎十七年・「六月癸亥（七日）」条・六一一三頁による）であり、こうした状況を実見していた李清は、五月十一日からの数日間のことをつぎのように伝えている。

壬辰（十一日）、馬士英 出奔す。亂民 〔自称太子の〕王之明を京師に擁立す。

上（福王弘光帝）の出奔するは、〔馬〕士英 猶お知らず。惟だ戎政侍郎の李希沆 先ず知り、遂に行く。〔馬〕士英 猶お之に後るなり。凡そ家を携する者は、皆な瞻顧（ためらう）して行く能わず。初め、〔王〕之明の屢しば訊（尋問）され、百官 皆な僞な

るを知る。然れども民間 猶お嘖嘖（議論紛紛）として真なりとするがごときなり。是に至り、二三の劣衿 首と爲り亂民を率いて之（自称太子の王之明）を擁立す。御殿（朝に臨む）すること三日、又た群 趙之龍の寓に往き、百官に入朝するを邀む。^{もと}〔趙〕之龍 手づから首と爲るの劣衿三人を斬れば、乃ち退く。〔そして、王〕之明を執えて獄に繋ぐ。廣昌伯の劉良佐 北を拒むの意無し、惟だ南門外に兵を縦ちて焚掠す。百姓城を攻めることあるかと恐れ、夜を徹して驚呼す。乃ち議して保國公の朱國弼を推して留守官と爲す。〔趙〕之龍 密かに使を遣りて江を渡り、啓（正式の公文書）もて北兵を迎えしむ。時に諸臣 猶お知らず、禮部尚書の錢謙益の所に集議（集まって協議する）す。〔錢〕謙益 太息して曰く、「事 此に至れば、惟だ小朝廷を作りて活を求むる有るのみ」と。啓稿を擬して〔趙〕之龍に送る。〔趙〕之龍 置きて用いず。内庫（皇宮の府庫）の銀絹・米豆・服玩・弓刀の屬 皆な劫らる。^{うばいと} 罄く馬士英及び群黨の家を擄う。^{ことごと} 又た合力して〔馬〕士英の標下（部下）の川兵を勦（討伐）し幾んど盡く。初め、輔臣の王鐸 青衣（平服）もて通れんことを謀る。識者 指し罵りて曰く、「若（王鐸）太子を贗とし、先帝の恩に辜けり」と。群 之を捶ち、鬚髪は盡く禿たり。^{なんじ} 挾みて〔趙〕之龍の處に至る。洵洵（やかましく騒ぐ）として撲殺せんと欲す。〔趙〕之龍 佯言もて之を獄に下す。故に免る。〔王鐸の〕室内の蓄うる所の書畫 極めて多きも、貲（家財）と俱に盡く。張孫振 禍するに及ばんことを懼れ、極めて〔馬〕士英の黨を罵り、自から免れんことを冀う。人 皆な之を笑う（『南渡錄』卷之六・「壬辰（十一日）、馬士英出奔、亂民擁立王之明於京師」条：明末清初史料選刊本『南渡錄』卷之五も、いくつかの文字の異同を除いてほぼ同じ）。

「五月十一日、福王弘光帝の南京逃亡に続いて、馬士英も出奔した。亂民たちは、自称太子の王之明を都に擁立した」条に、福王弘光帝が出奔したことは、馬士英もまだやはり知らなかった。ただ兵部侍郎の李希沆が先に知り、そこで逃げ出してしまった。馬士英はやはり、それに遅れてしまった。家族を伴っている者たちは、ためらって出奔できなかった。そもそも、自称太子の王之明は何度も尋問され、官僚たちは皆な「ニセモノ」であることが分かっていた。しかし、民間では議論紛々として「ホンモノ」だとしていた。福王弘光帝が出奔する事態になって、二三の劣衿が首謀者となって亂民をひきいて自称太子の王之明を擁立した。そして、三日にわたって宮中で政務を執った。さらに、群衆は、趙之龍の邸宅に行き、官僚たちに宮中に参入するように要求した。趙之龍は、手づから首謀者の劣衿三人を斬ったので、群衆は退去した。そして、自称太子の王之明を捕らえて獄に繋いだ。南京の防御を担っていた廣昌伯の劉良佐は、清朝の軍を拒む気持ちはなく、南門の外に兵士を放って火をつけたり、掠奪したりした。人々は、劉良佐が南京を攻撃するのではないかと心配し、夜を徹して驚き叫んでいた。そこで、保國公の朱國弼を推薦して留守官とした。この時、官僚たちは何も知らず、禮部尚書の錢謙益の所で会議していた。錢謙益は、ため息をつき「こうした事態になれば、小朝廷を作って生き残

りを考えるだけだ」と言う。そして、提案書の試案を書いて趙之龍に届けた。しかし、趙之龍それをそのままにした。宮中の蔵の銀絹・米豆・服玩・弓刀などはすべて奪い去られた。そしてすべての馬士英やその一党の家の者を捕らえた。さらに力を合わせて、馬士英の部下の四川の兵をほとんど根絶やしにした。大學士の王鐸は、平服で逃げ出そうとした。見知っている者が、指さして罵って「お前は太子（自称太子の「王之明」）をニセモノだとして、先の崇禎帝のご恩にそむいた」という。群衆は、王鐸をなぐりつけ、鬚や髪はすべてなくなってしまった。そして、王鐸を引き連れて趙之龍のところにやってきた。やかましく騒ぎ立てて、撲殺しようとした。趙之龍は、偽って王鐸を獄に繋いだ。王鐸の屋敷に収蔵された書画はきわめて多かったが、家財とともにすべて無くなってしまった。張孫振（安徽霍山の人。崇禎元年戊辰科（一六二八）三甲三十三名の進士）は禍に巻き込まれることをおそれ、口を極めて馬士英一派をののしり、自分だけでも助かろうとした。人々はみんなその行為を笑った、という。

福王弘光帝は、最高実力者の馬士英にも告げずに、南京を出奔する。南京では、二三の劣衿が首謀者となって亂民を先導して獄に繋がれていた自称太子の「王之明」を担ぎ出し、宮殿に乱入する。自称太子の「王之明」は、即位したつもりで三日間にわたって政務を執った。ところが、治安維持を担当していた趙之龍は、もともと清朝に投降の意志を固めていたので、「王之明」を再び獄に繋ぐ。

このように、李清は、はっきりと自称太子の「王之明」が「御殿（朝に臨む）すること三日」と記している。繰り返しになるが、この状況が、蘇州に伝えられ、『蘇城紀變』に「南都 已に定王を立つ」と記されることになったのであろう。

なお、南京の福王政権のもとにあらわれた太子に関する諸問題については、別稿で改めて考察したい。

（つづく）